

論文審査の結果の要旨および担当者

報告番号	※	第	号
------	---	---	---

氏 名 社河内 友里

論文題目 Between Counterculture and Consumerism:
Transformations in Representation of Beatniks in American
Comics since the 1950s

論文審査担当者

主 査	名古屋大学教授	長畑 明利
委 員	名古屋大学教授	村主 幸一
委 員	名古屋大学准教授	Mark Weeks
委 員	ノートルダム清心 女子大学教授	David S. Ramsey

1. 本論文の構成と概要

本論文 "Between Counterculture and Consumerism: Transformations in Representation of Beatniks in American Comics since the 1950s" (「反体制文化と消費主義の間で：1950年代以降のアメリカン・コミックスにおけるビートニク表象の変容」) は、1950～1960年代のアメリカで注目を集めた「ビートニク」のステレオタイプが、その後どのように変容したかを、1950年代から2010年代までのアメリカの漫画 (「アメリカン・コミックス」) における表象から明らかにするものである。

ビートニクは反順応主義の姿勢が顕著であったビート作家の影響下に生まれたが、そのイメージはステレオタイプ化され、種々のメディアを通じて社会に広く拡散された。大衆文化、とりわけ漫画においても、ビートニク表象は様々な形で現れ、それはビートニクの出現以来、2010年代に至るまで続いている。本論文は、1950年代以後の漫画作品に現れるビートニク表象を取り上げ、その変容を明らかにするとともに、ビートニク表象における反順応主義の扱いを、主として消費主義社会との関係から検討するものである。その作業を通じて、本論文は、1950年代以後のアメリカ大衆文化における対抗文化の存続と、消費文化によるその搾取をめぐる議論に貢献しようとする。

本論文は全5章からなり、これに Introduction (序論) と Conclusion (結論) および Bibliography (文献リスト) が加わる。また、論文末尾には Appendix (付録) として年表が加えられている。「序論」では、問題設定と概念ならびに用語説明、各章の構成が示される。

第1章 "Beatniks in Comics in the 1950s" は、1950年代の漫画に見られるビートニク表象を論じる。学位申請者 (以下、申請者) は、1950年代半ばの漫画において、社会に対する反順応主義の姿勢がヒップスターの描写を通して示されたことを示し、それがアメリカの漫画におけるビートニクのステレオタイプの起源となったと論じる。また、1954年に制定されたコミックス倫理規定は保守的社会の象徴とみなされるが、一部の漫画家はヒップスターのイメージを用いてこの倫理規定への反抗の姿勢を示したことを指摘する。さらに、ビートニクがアメリカの主流文化において広く知られるようになった1950年代後半には、消費主義社会の中で露呈するビートニクの反順応主義の矛盾と限界を批判する漫画作品が現れたことを、Jules Feiffer や William F. Brown の作品を例に挙げて示す。この関連において、申請者は *Mad Magazine* を詳細に検討し、それがビートニクの反順応主義の限界を批判するにとどまらず、雑誌独自の反順応主義の例を示したことを指摘するが、それもまた Thomas Frank の言う「ヒップ・コンシューマリズム」の一例であり、消費主義社会による包摂を示すものである、と申請者は論じる。

第2章 "Beatniks in Comics in the 1960s" は、1960年代のアメリカの漫画に見られるビートニク表象を論じる。申請者によれば、1960年代において、メインストリームの漫画 (コミックス倫理規定を遵守する漫画) には、*The Many Loves of Dobie Gillis* の Maynard G. Krebs やスーパーヒーローものである *Justice League of America* の Snapper Carr のように、中産階級の価値観に迎合するコミカルで無害なビートニクが登場し、一方、アンダーグラウンドの漫画 (コミックス倫理規定への反抗を示す漫画) では急進的なボヘミアニズムが追求されたものの、1960年代後半になると、後者においても、*Beatville U.S.A.* や *Fritz the Cat* など、ボヘミアニズムへの懐疑の姿勢を示す作品、あるいは、*Mad* のように、ボヘミアニズムに対して冷笑的な立場をとる作品が現れてくる。申請者は、急進的ボヘミアンの立場に見出されるこのような懐疑的かつ

冷笑的な立場は、中産階級の立場とボヘミアンの立場の中間に位置づけられるものであるとし、それは David Brooks が 1990 年代における中産階級とボヘミアンの価値観の融合を指して命名した「ブルジョア・ボヘミアン」の立場に類似すると論じる。

第 3 章 "Beatniks in Comics in the 1970s" は、1970 年代のアメリカの漫画に見られるビートニク表象を論じる。申請者によれば、1970 年代になって、漫画におけるビートニクの登場回数は激減したが、ビートニクが登場する作品はあり、本章はそれらの事例について考察する。申請者は、1970 年代のメインストリームの漫画の例として、再び *Justice League of America* を取り上げ、1960 年代には明るく単純なビートニクとしてコミカルに描かれていたスナッパーが、1970 年代になるとあまり登場しなくなり、また、彼が登場する場合には、より思慮深い人物として描かれていることを指摘する。一方、アンダーグラウンドの漫画は 1970 年代にも依然として反順応主義の姿勢を示したが、*Fritz the Cat* では、ビートニクの登場人物フリッツの死が描かれており、申請者はそれを急進的な反順応主義の終焉を意味するものであるとする。さらに申請者は、1970 年代半ばに、衰退するアンダーグラウンドの漫画に代わって、オルタナティブ・コミックスと呼ばれる漫画が成長したことを指摘し、その一例である *Zippy the Pinhead* においては、ビートニクが主流文化とボヘミアニズムという二項対立に対する新たな立場を示唆していると論じる。

第 4 章 "Beatniks in Comics in the 1980s" は、1980 年代のアメリカの漫画に見られるビートニク表象を論じる。申請者によれば、1980 年代のメインストリームの漫画にビートニクが登場する頻度は 1970 年代よりもさらに減少し、*Justice League of America* においても、スナッパーはほとんど登場しなくなる。それはビートニクのステレオタイプが持つボヘミアンのイメージが当時の保守主義的価値観と相容れないためであったと申請者は論じる。しかし、1980 年代末になると、*Justice League of America* にスナッパーが再び頻繁に登場するようになり、再登場後の彼は、たくましい身体、自信に満ちた、成熟した内面性、そして、超人的な力を持つスーパーヒーローに修正されている。しかし、その一方、彼のボヘミアンとしての側面も強調された。申請者は、ボヘミアニズムと力強い肉体の両方を示すこの描写は、レーガン時代後の保守的ではあるが家庭的でもある理想的なヒーロー像を反映するものであると主張する。また申請者は、再登場したスナッパーを含む 1980 年代の数少ないビートニク表象を示す漫画には、当時流行していた「レトロ」の傾向（アイロニカルな再解釈をとまなう懐古主義）を見て取ることができると述べ、また、オルタナティブ・コミックの *Zippy the Pinhead* において、主流文化によるサブカルチャーの包摂がパロディー化して描かれていることを指摘する。

第 5 章 "Beatniks in Comics since the 1990s" は、1990 年代以後のアメリカの漫画に見られるビートニク表象を論じる。申請者によれば、1990 年代には、アメリカの大衆文化においてビートニクのステレオタイプの再評価が起こり、漫画においても、特にスーパーヒーローものにおいて、ビートニク表象が多く見られるようになった。スーパーヒーローものにおけるビートニク表象は、ビート作家の文化を反復しつつも、ビートニクの歴史的背景やステレオタイプが修正され、「クール」でない側面が捨象された。また、スーパーヒーローもの以外の漫画では、修正の度合いはさらに強まる。申請者は、これらの修正は 1950 年代のビート作家に見られる「反知性主義的知性主義」に比較しうるものであると論じ、そこに時代の修正主義的かつ知性主義的傾向の反映を見る。また、これらの修正主義的かつ知性主義的なビートニク表象は David

Brooks が論じる「ブルジョア・ボヘミアン」の「啓蒙的資本主義」の概念に関連するものであると主張する。

「結論」は、本論文各章の論点を整理するとともに、1950 年代から 2010 年代までのアメリカの漫画におけるビートニク表象の変容から、次の点が明らかになると述べる。すなわち、ビートニクのステレオタイプは絶えず修正されるが、その際、ビートニク表象は、主流社会の経済・政治状況に好都合な形で「ヒップ」な体裁をとる。一方、アンダーグラウンドの漫画やオルタナティブ・コミックスにおいては、ビートニク表象はしばしば消費主義社会からの搾取に対する抵抗を示すための要素として言及される。さらに、ビートニク表象は、主流文化と対抗文化の二項対立そのものを問う立場を示す際にも利用される。

2. 本論文の評価

本論文の価値は、まず第一に、1950 年代から 2010 年代に至るアメリカの漫画に現れるビートニク表象の変容を示した点にある。ビートニクのステレオタイプの研究は、これまで主として 1990 年代におけるビートニクのリバイバルに焦点を当ててなされており、それらはおおむね 1950 年代末、60 年代のビートニク表象とリバイバルとの比較を行うものであった。本論文は、それらの研究とは異なり、1950 年代以来の漫画に現れるビートニク表象の変容を、反順応主義と消費主義社会の関係に焦点を当てて明らかにしようとするオリジナルな試みであり、高く評価できる。第二に、アメリカの漫画に現れるビートニク表象の実例を具体的に提示したことにも価値がある。アメリカの漫画に見出されるビートニク表象をリストアップすること自体困難な作業であり、申請者の調査から漏れた事例があることは推測できるものの、1950 年代から 2010 年代に至る種々の事例を示した本論文には、事例紹介としての価値が認められ、評価できる。第三に、従来、主として文学作品を対象に論じられてきたビート作家の影響を、大衆文化である漫画を対象に考察した点も評価できる。とりわけ、ビート作家が示した反順応主義の大衆文化における変容の諸例を示したことには価値があり、評価できる。

一方、本論文には次のような弱点も見出される。1950 年代から 2010 年代という長いスパンを論考の対象にしたために、考察が不十分となる箇所が生じたこと、各時代の政治的・社会的背景についての考察が不十分であること、作品中のビートニク表象の検討が主として服装や言葉遣いなどの表面的特徴に集中しており、内面的特徴が十分に問題にされていないこと、漫画の読者層についての検討を欠いていること、ビートニク表象についての検討において、人種、ジェンダー、年齢についての考察が不十分であることなどである。

これらは重要な指摘ではあるが、論文全体の評価を損なうものではなく、むしろ、申請者の今後の研究活動に役立てるべき点として指摘されるものである。本論文は、1950 年代から 2010 年代に至るアメリカの漫画に現れるビートニク表象の変容を示し、それによって、ビート文化の特徴であった反順応主義が消費主義社会との関係においてどのような変化を遂げるか、さらには、消費主義社会の中で対抗文化がどのような形で存続するかを明らかにしようとした意欲的な論文である。その成果は、アメリカ文化研究、大衆文化研究に新たな知見を加えるものであり、審査委員は全員一致して、本論文が課程博士を授与されるに値するものであると判断した。